

小説『魍魎の匣』の映画化 —主要登場人物4名に注目して—

澤 誉思子

『魍魎の匣』とは1995年に京極夏彦によって書かれた小説で、百鬼夜行シリーズのうちの一作である。2007年に映画化されており、私はその映画を見て強く疑問を抱いたため、本研究を行うことにした。

まず一部のキャラクターの行動が小説とはまったく異なることが気になった。来歴などの設定は変わらないものの、ストーリー進行上の役割や性格、登場回数が違うように感じた。またストーリー展開も大きく異なっており違和感を抱いた。しかしこのように違う点が多いにもかかわらず、私はこの小説と映画の印象は変わっていないように感じた。

上記の疑問点を解明するため、私は「物語の中核となっている主要登場人物4名のそれぞれの役割によって、ストーリー展開に違いが生じ、他方雰囲気は保持されている。」という仮説を立てた。研究方法は内容分析とグループインタビューと製作者のインタビュー記事の分析の3つを用いる。

内容分析では、小説をもとに6つの事柄にカテゴリ分けし、ストーリー展開の違いを探るとともに、主要登場人物4名がそれにどのようにかかわっているかも見た。結果、いくつかのカテゴリについて小説と映画では扱われ方に違いがあるとわかった。さらに主要登場人物4名のうち2名の各カテゴリへのかかわり方や登場回数が小説と映画では大きく異なっていることが明らかになった。残りの2名についてかかわり方は変わらず、内容を見ると語り部と探偵の役割を果たす人物であることが分かった。

グループインタビューでは、映画を鑑賞した後、数人で映画の感想やメディアミックスなどについて自由に討論してもらった。結果として、過半数の人から内容分析の結果と同じ回答を得ることができた。また、小説と映画の雰囲気が同一であるという回答も同様に得た。

インタビュー記事の分析では、京極夏彦は自著の映画化に対して好意的であることが分かった。映画と小説は伝える手段が別物であり、映像作品としてきちんと出来上がっているのならば自分が口を出すことではないと考えているようだ。映画監督である原田真人もあまりに長大な原作をまったく同じように映像化しようとはそもそも考えておらず、2時間の映像作品にするために大幅な改変を加え、映像作品として完成度の高い作品を作ろうと苦心した様子がうかがえた。

研究の結果、主要登場人物4名のうち2名の扱いや役割を変えることでストーリーの簡素化を図り映像作品としての形を作っていることが分かった。ストーリー展開の変化は簡素化を図った都合上発生したものでやむを得ないものであった。一方で主要登場人物の残りの2名の扱いや役割を変えないことで雰囲気の保持を図っているという結果を得た。

(指導教員 後藤嘉宏)